

ジャン・マルタン・シャルコーと神経障害性関節症

小林 晶

福岡整形外科病院

神経学領域でのジャン・マルタン・シャルコー (Jean Martin CHARCOT, 1825-1893) の名は近代神経病学を確立した人として、その業績とともによく知られている。特に筋萎縮性側索硬化症およびヒステリーの詳細な観察記述は、神経病研究の中で白眉のものである。その他、その名を冠する Charcot-Marie-Tooth 病も報告している。因みに、彼のもとには、我が国からは三浦謹之助 (1864-1950) が 1892 年に留学している。

しかし、整形外科以外の領域であまり論じられないシャルコーの業績に、神経障害性関節症 (arthropathie neurogène) がある。これは 1868 年パリのサルペトリエール病院の臨床講義で行った詳細な報告で、以後シャルコー関節 (症) として記載されている。近年、糖尿病の増加とともに合併症の一つとして、整形外科以外の領域からも足部関節症報告が漸増しているが、関節自体の変化の病因、病態は依然として不明の部分が存在する。

今回は、世界初の記念すべき神経障害性関節症の論文とシャルコーの生涯を紹介する。

問題の論文は 1868 年創刊されたばかりの「正常生理学, 病理学記録」に掲載されたもので、「脳あるいは脊髄障害に起因すると思われる関節疾患について」という題で発表されている。これは毎週火曜日に行われた臨床講義の記録である。論文は 2 症例を提示し、第 1 例は突然発症の上肢、とくに肩部、前腕の腫脹と電撃痛を訴える患者である。この例は約 10 年来失調性歩行があった。電撃痛に続いて、肘関節に異常可動性と比較的硬い腫脹が出現したが、関節部は無痛であった。関節には水症が見られ雑音があった。神経学的には多発性硬化症に酷似していた。第 2 例は、胃痛、嘔吐を前駆として、夜間の電撃痛が足部に起り、次いで膝関節の急激な腫脹と水症が続くが、関節には疼痛を訴えない。徐々に内反膝を呈し、大きな動揺性を認め歩行異常を伴っている。しかし、関節自体の自他動による疼痛はなく、ただ雑音が聞こえるだけであった。この例は 32 年前に梅毒に罹患していて、失調性歩行があった。死後剖検で脊髄後索の変化を認めて、脊髄癆性関節症 (arthropathie tabétique) と考えた。

この論文には、以前これと似た関節症状と失調性歩行を認めた 2 例の患者例を加えて、次のように推論している。外的要因や体質的異常がなく、失調性歩行があって関節に急劇な腫脹、水症、異常可動性を示し、関節を動かしても無痛で発赤も無い、全例失調性歩行に続いて、関節症状が出現している。このように急性関節炎とは異なる病像が見られる。これは脳あるいは脊髄の障害が基盤にあって起こる関節症ではないかと述べている。

以後、このような関節疾患は脊髄空洞症、多発性硬化症、その他の中枢・末梢神経障害にも見られることが明らかになり、「シャルコー関節」(Charcot joint) と呼ばれるようになった。現在はこれらの神経障害疾患よりも、糖尿病性神経・血管障害に起因する足のシャルコー関節と、合併症としての足部潰瘍・壊死が問題になりつつある。

シャルコーは 1825 年 11 月 29 日パリに生まれ、サルペトリエール病院で勤務し、1882 年教授となった。観察の鋭い臨床家であって、多くの門下生を育てた教育者でもあった。友人にヴェルピアン、門下にはババンスキー、マリーなどがいて、フロイトも一時ここで学んだ。見学者は引きも切らず、多くの有名人が彼の診察を仰いだ。いわば当時の神経学のメッカであった。普段は物静かな人で、自分で絵を描くほど芸術を愛し、古典音楽を好んだ。旅行中心臓発作を数回起し、急性肺水腫で 1893 年 8 月 16 日に死去した。